研究課題　多可町杉原紙研究所所蔵寿岳文章氏和紙コレクション料紙調査研究

研究経費　四九万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　湯山賢一(多可町杉原紙総合調査委員会）

　所内共同研究者　及川亘・石津裕之・高島晶彦

　所外共同研究者　安平勝利(多可町那珂ふれあい館）・大川昭典(元高知県立紙産業技術センター技術部長)・本多俊彦(金沢学院大学)・富田正弘(富山大学名誉教授)

研究の概要

（１）課題の概要

　本コレクションは、日本前近代における紙の歴史の学術的研究について先駆的業績を残した寿岳文章氏が、その研究のため全国を回って蒐集した和紙原本の集積である。寿岳文章氏が新村出氏とともに、中世に最も使用された杉原紙の原産地として、多可町杉原谷の地を認定したのをきっかけとして、多可町で杉原紙の復興と研究の機運が高まり、杉原紙研究所が設立され、活動を続けてきたが、文章氏の没後、令嬢の章子氏から当該コレクションが杉原紙研究所に寄附され、研究所で整理が行われてきた。ただ、これまでの整理では、産地と紙の種類などの確認がなされているが、紙の厚さ・重さ・密度、原材料や填料、製紙法の解明など物理的技術的解明までは行われていない。  
本調査研究は、これまでの整理をさらに進化させ、上記の調査研究を進めようとするものである。確かに、このコレクションは、戦前に制作されたものではあるが、原材料や技術は前近代に近いものがあり、何よりも全国にわたって網羅的に蒐集されているところに意義がある。したがって、近世の製紙の地域的特質を考える上でも、重要な材料となることは間違いない。そして、これらの調査研究の結果を、数量的に、かつ顕微鏡写真などによって視覚的に、学界の共通素材として提供せんとするものである。

（２）研究の成果

　二〇一九年度の共同研究で得たデータを含め、東北・北陸・関東甲信越・関西・中国・四国・九州一六〇の和紙の原材料、塡料の種類と分量、繊維切断の有無、非繊維物質の残存度、縦横寸法、厚さ、重さ、密度、簀目の太さ、糸目幅、繊維束の状況、板目・刷毛目・紗目などの料紙データおよび繊維の顕微鏡画像データを得た。  
また本コレクションから近世和紙生産の地域分布の状況の考察した結果、近世の抄紙技術を継承し、その姿を伝えているものと洋紙に対抗する白さを意図的に用いられた木材パルプや稲藁、マニラ麻、エスパルト等を原料に加えた近代の技術変革と製品の均一化が見受けられること、原料確保の容易さから役所文書反故を原料とする漉き返し(再生紙)も多いこと、昭和時代前半の和紙は圧倒的に後者の方が多く、近代和紙の時代であることを証明した。  
なお、調査結果については、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一－一二「多可町立和紙博物館壽岳文庫所蔵寿岳文章和紙コレクション料紙調査研究　東京大学史料編纂所一般共同研究報告書(二〇一九年度～二〇二一年度)として刊行した。